

平成 27 年 4 月 1 日

## 英語語法文法学会主催

### 第 11 回英語語法文法セミナー開催のお知らせ

英語語法文法学会

会長 内田 聖二

英語語法文法学会では、学会の社会貢献の一環として、2005 年より毎年「英語語法文法セミナー」を開いてきましたが、今年も第 11 回目のセミナーを 8 月 3 日(月)午後 1 時半から 5 時半まで関西学院大学梅田キャンパスにて開催することになりました。今年度のテーマは「認知文法の考え方を現場にいかす」です。プログラムの詳しい内容については当学会のホームページをごいただければ幸いです。

英語教育の現場では、教える内容は基本的に大きな変化はないように思われますが、ことばは時を経て変わっていきます。英語もその例外とはなりえませんし、むしろこのインターネットの時代ではそのスピードは増しつつあると言っても過言ではありません。このセミナーでは現代英語の語法や文法などの言語事象を最新の英語学、言語学の知見を紹介、援用しながら講義するものです。今回は、近年隆盛を見せる認知言語学の考え方を英語教育に活かそうという試みです。専門用語は極力避けてお話ししますので、認知言語学についての知識はまったく必要ありません。

セミナーの対象としては、中学校、高等学校の先生方だけではなく、広く大学の教員、将来教職を目指す学生、院生などを想定しています。もちろん、学会員、非学会員を問いません。研修、研究の機会としてご利用をお考えいただければ幸いです。

たくさんの方のご参加をお待ちしております。

# 第11回英語語法文法セミナー

## テーマ「認知文法の考え方を現場にいかす」

司会・講師 大橋 浩（九州大学）

講師 川瀬義清（西南学院大学）

講師 植田正暢（北九州市立大学）

講師 長加奈子（北九州市立大学）

日時：平成27年(2015年)8月3日(月曜)13:30~17:30

会場：関西学院大学梅田キャンパス 1405

(大阪市北区茶屋町19-19 アプローズタワー14階1405室)

### プログラム:

- |             |  |
|-------------|--|
| 13:30~13:40 | 会長挨拶とセミナー世話役からの全体趣旨説明  |
| 13:40~14:20 | 大橋 浩(九州大学)<br>「なくてはならない修飾語」                                    |
| 14:20~15:00 | 川瀬義清(西南学院大学)<br>「英語の受動文について」                                   |
| 15:00~15:10 | -----休憩-----   |
| 15:10~15:50 | 植田正暢(北九州市立大学)<br>「二重目的語構文と「やりもらい」                              |
| 15:50~16:30 | 長加奈子(北九州市立大学)<br>「日本人英語学習者の二重目的語構文使用の特徴と学校英文法への示唆：動詞 give の場合」 |
| 16:30~16:45 | -----休憩・質問用紙記入-----  |
| 16:45~17:25 | 質疑応答   |
| 17:30       | セミナー終了   |

---

参加費(資料代を含む):2,000 円(当日、受付にてお支払いただきます)

※ 本セミナーは、学会会員以外の方を含め広く開かれているものですのでどなたでも自由に参加できます。会場収容人数(定員 80 名)の関係から、参加ご希望の方は平成27年7月31日までに、件名を「セミナー参加希望」として [segu.seminar@gmail.com](mailto:segu.seminar@gmail.com) までお知らせください。先着順で受け付けます。

## 各講師の発表概要

### なくてはならない修飾語

九州大学 大橋 浩

一般に、主語、述語、目的語、補語といった文の主要素に対して修飾語は副次的なはたらきをするとされるが、次に見るように、修飾語がないと文が不自然になってしまう場合がある。以下はいずれも Goldberg and Ackerman (2001)からの例である。

- (1) a. #This house was built.  
b. This house was built last year.
- (2) a. #This book reads.  
b. This book reads easily.
- (3) a. #Pat laughed a laugh.  
b. Pat laughed a hearty/quiet laugh.

このように修飾語が義務的な場合をいろいろな構文について取り上げ、自然な文になるためになぜ修飾語が必要であるかを考察していく。

### 英語の受動文について

西南学院大学 川瀬義清

日本の学校教育では、受動文は能動文との関わりで教えられることが多い。しかし、英語の受動文には Quirk, R. et al. (1985)が *central passive* と呼ぶ (1) のような典型的な受動文だけではなく、(2) のように状態動詞を用いた受動文、また (3) のようにいわゆる心理動詞を用いたものまで非常に多様である。

- (1) This violin *was made* by my father.
- (2) All these gases are known to be highly chemically reactive.
- (3) She was surprised to find the Queen in conciliatory mood.

様々な受動文の用例をみていると、能動文から派生したものと考えられるよりも、受動文それ自体で一つの独立した構文としてとらえる方がよいと思われる。

本発表では、認知言語学の知見を生かしながら英語の受動文の表す事態認知およびその機能について考察する。また、受動文の具体的用例について *British National Corpus* を用いて動詞の種類による特徴を分析する。時間があれば学習者コーパスである *ICNALE* をもちいて、日本人英語学習者の書く受動文の特徴についてもふれたい。

## 二重目的語構文と「やりもらい」

北九州市立大学 植田 正暢

学校文法で二重目的語構文 (S+V+O1+O2) を取りあげる際のポイントの1つに、S+V+O2+to/for+O1 への書き換えと前置詞 to と for の選択がある。書き換えられるからと言って両構文が同義ではなく、実際には意味の違いがある。そのため、次のような対比が観察される。

(1) a. I sent the package to Maria/London.

b. I sent Maria/\*London the package.

さらにデータを加えると、Oehrle (1976)で次のような例があげられている。

(2) a. I threw {you the ball/the ball to you} but it was intercepted by an opponent.

b. ??John threw the catcher the ball, but the throw went wide.

二重目的語構文が表すとされる「やりもらい」(つまり、典型的には<人にもものをあげる>という意味)とは実際のところどのような特徴があるのだろうか。さまざまな例を観察しながら、二重目的語構文が成立する条件を探っていきたい。また、どのような動詞が二重目的語構文で用いることができ、どのような動詞が用いることができないのかを見ていく予定である。

## 日本人英語学習者の二重目的語構文使用の特徴と学校英文法への示唆：動詞 give の場合

北九州市立大学 長 加奈子

教育現場において、例えば以下の例のように、二重目的語構文と与格構文は書き換え可能な構文として教えることも珍しくないだろう。

(1) a. John gave Mary a book.

b. John gave a book to Mary.

確かに結果的に同じ出来事を表すことが可能であるが、言語学の様々な研究によって、この2つは似て非なるものであることが指摘されている。しかし助詞によって格関係を表示する日本語を母語とする英語学習者にとっては、その違いはあまり明確ではなく、日本語話者による2つの英語構文の使用状況を分析すると、英語母語話者とは異なる傾向を示している。そこで本発表では、二重目的語構文の典型的な動詞である give を取り上げ、BNC および ICNALE 等のコーパスの分析結果をもとに、日本語を母語とする英語学習者の二重目的語構文と与格構文の使用にどのような特徴がある

のかについて見ていく。さらに2つの構文を学校現場でどのように教授することが可能なのか、教授法の試案を提示する。